

### ◎ 原子力発電所事故による放射性物質の影響

- ・ 広域の放射性物質の影響を把握するため文部科学省が行った航空機モニタリング調査の結果（平成23年11月11日）では、下図のとおり、県内の空間放射線量と岩手県沿岸北部は同レベルとなっています。また、放射性セシウム沈着量も一番低いレベルとなっています。

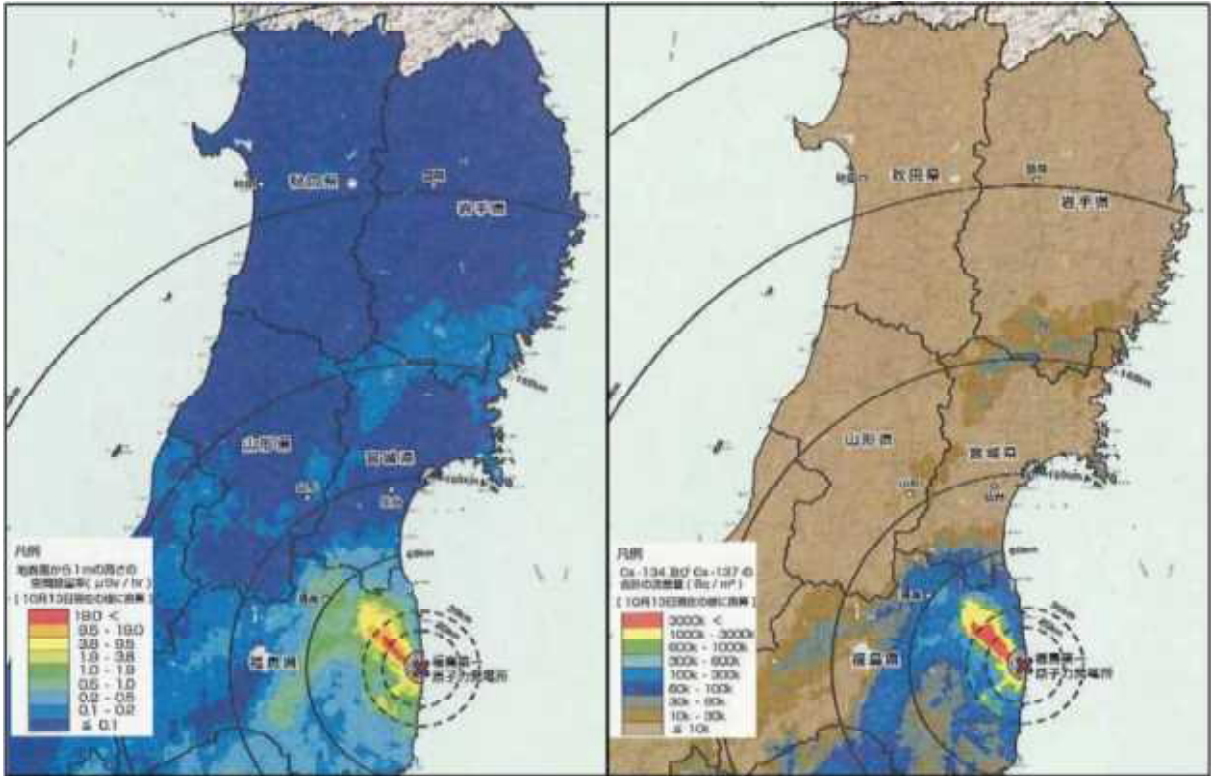


図1 地表面から1m高さの空間放射線量率

図2 地表面へのセシウム134、137の沈着量の合計

### ◎ 食品に関する放射性物質の基準値

- ・ 食品中の放射性物質に関する基準値は、平成24年4月から以下のようになっています。基準は、文部科学省が行ったモニタリングの結果を踏まえ、放射性ストロンチウムやプルトニウム等の影響も加味した上で、放射性セシウムの値で示されています。

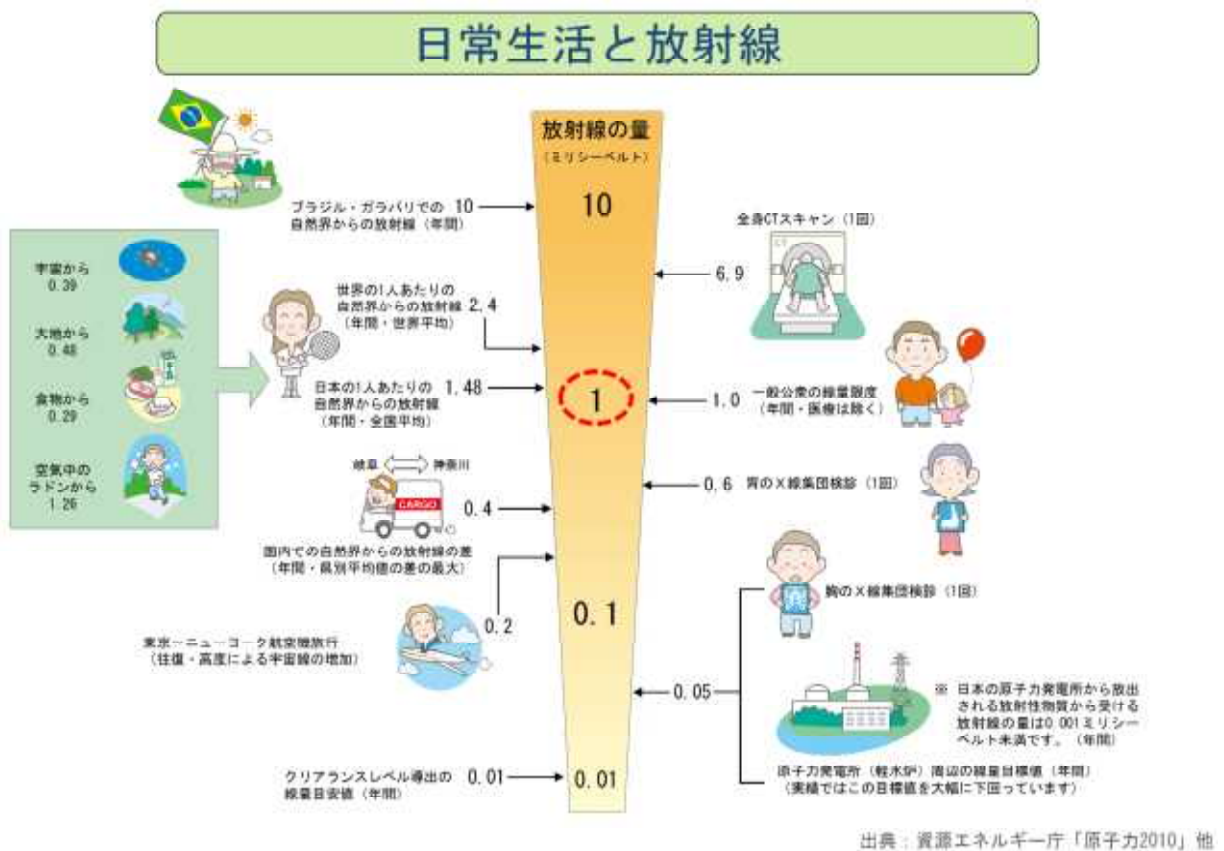
[ 単位：ベクレル/kg ]

食品群	一般食品	牛乳	乳児用飲料	飲料水
基準値	100	50	50	10

平成23年3月時点の食品中の放射性物質に係る暫定規制値においても、チェルノブイリ原発事故の例などを参考に、放射性ストロンチウムは放射性セシウムの10パーセント程度含まれているとして、放射性ストロンチウムの影響も放射性セシウムに含めて設定されていました。

## ◎ 放射線による健康への影響

- 放射線による健康への影響として発癌のリスクが心配されますが、それを検証するには、多くの集団において、受けた線量とともに癌が起こる確率も上昇するかどうかを調べる必要があります。
- 原爆被爆者を対象とした疫学調査では、およそ100ミリシーベルト以上の線量では、線量とともに癌死亡率が増加することが確認されています。
- しかし、およそ100ミリシーベルトまでの線量では、放射線と癌発生についての研究結果に一貫性はなく、放射線による癌死亡の増加を示す明確な証拠はありません。



※1ミリシーベルト (mSv) = 1,000マイクロシーベルト ( $\mu$ Sv)

※自然放射線であっても人工放射線であっても、受ける放射線量が同じであれば人体への影響の度合いは、同じです。

※一般公衆の年間線量限度の1ミリシーベルト/年と日本人1人当たりの自然放射線量を合わせても、世界平均1人当たりの自然放射線量と同程度です。